
Love is blind

カトラス

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

Love is blind

【Nコード】

N9257B

【作者名】

カトラス

【あらすじ】

目を失明してしまった夫が、妻の力をかりて小説を執筆します。
あとは読んでみてください。

Love is blind

「いつも。悪いね」

「いいのよ、あなたお気になさらないで」

妻が、私の横でワープロをうつ音が聞こえる。

「えーと、その前なんて言ったの？ ごめんなさい、あなた早口だから」

タイプがおいつかないわ」

「ああ、ごめんごめん、結末あせちゃって、つい早口になったな」

わたしが、早口で話した言い訳をすると、妻の笑い声がきこえた。

「いいのよ、いいのよ。早く完成させましょ」

そう言って、妻は私の肩を軽くもんでくれた。

実は、私は、目がみえない。

三年前に、糖尿病を患ってしまい、合併症によって失明してしまっただからだ。

失明してしまっただからというものの、妻は以前よりも私に、優しく接してくれた。

目がみえなくなつて、職を失い、ふさぎこんでいた私に、

「あなた、毎日退屈でしょ。なにか趣味をもちなさい。

あ、そうだ あなた前から本読むの好きじゃなかった？

今度は、あなたが小説書いてみるのってどうよ」

「だって、俺、目がみえないんだぞ。どうやって書くんだよ」

「バカねえ、あなた、わたしがいるじゃない。わたしがタイプしてあげる」

そういつて、私と妻の執筆、二人三脚が始まった。

妻は私が働けなくなつてから、生活を助けるために、

朝だけ新聞配達をしてくれていた。

妻は仕事が終わると、ずっと私の面倒を見てくれている。

料理、洗濯、着替えにトイレの用足し、お風呂と数えあげたらきりが無い。

ほんと、頭がさがる思いだ。

それから、夜になると、私の執筆を手伝ってくれる。

私はというと、暇な一日、ひたすら小説のアイデアばかり考えていた。

小説が完成すると、必ず妻に感想を聞いてしまう。

「どうだ、面白いか？ 感動するか？」

妻は必ず、

「よかったわ〜あなた才能あるんじゃない」と言ってくれた。

妻のいつてくれた事をまにうけた私は、

「どっか新人賞でも応募してくれないか

才能あるんだったら賞とれるだろう。賞とったら、出版してもらって、映画とかドラマになるだろう。お前も新聞配達なんかしなくて

すむぞ」

そんな、夢みたいな事を、私は真剣にいつていた。

「そうね、あなただったら、本当に売れっ子作家さんになれるかもよ。」

この作品なんか、いいんじゃない応募しときますね」

そう妻はいつてくれた。

しかし、現実は甘くない。いつまでたっても新人賞もとれないし、出版の話もこなかった。

私はそのうちに、妻が私に気をつかって才能があるなんて、

嘘を言ってるじゃないかと思いつ出した。

それで私は妻に、

「お前の意見はあてにならない。誰か俺の作品を読んでくれる人をさがしてくれ」と頼んだ。

そう私が言つと、妻は、

「あなた知ってる。最近、携帯電話なんだけどね、小説の投稿サイトあるのよ。今度そこにだしてみましよう。そこだったら、すぐに

感想とか作品の評価してくれるのよ」

「それは、いいなあ〜早速たのむよ」

こうして、私は投稿サイトに作品を出してみた。

毎晩、妻は、私が寝る前に投稿サイトに送った作品の感想評価を話してくれた。

「あなた、すごいわ。みなさん。

あなたの作品楽しみにしてるんだって、全部読んであげたら、朝までかかってしまうわよ」

妻が読んでくれる感想は、歯の浮くものばかりだった。

そして、私は有頂天になっていた。

そんな時、ひさびさに私の家に来客者があつた。

来客者は、以前私が勤めていた会社の同僚だった。

「久しぶりだなあ〜仕事がなかなか忙しかったもので 元気にしてたか？」

と同僚は言った。

「ああ、元気だよ。そうだあ、お前にみせたいものがあるんだ」

私は同僚に自慢したい気持ちがあつて、投稿サイトに小説をだしてる話をした。

「なかなか、評判いいんだぞ。パソコンの中に感想入ってるから見てくれよ」

同僚はパソコンを立ち上げて、感想をみた。

そして、私に言った。

「おい。何も感想なんかあ〜ないぞ」

私は頭が、真っ白になった。

やっぱり、そうだったんだ。

妻は私を気づかかって、ずっと嘘をついていたんだ。

「どうした、お前、顔色悪いぞ」

同僚が心配して、わたしにそう言った。

「うん、少しめまいがしてきたんで悪いが帰ってくれないか」と、私は言っていた。

「そうかあゝまたくるよ」同僚は帰っていった。

その日の夜。

私は妻にあたりちらしてした。

「なんで、あんな嘘つくんだ。同僚に恥かいたじゃないか」

妻は言い訳もせずと私の文句を聞いていた。

しばらくして妻の嗚咽する声がきこえた。

妻の泣き声を聞いて、私は我に返った。

ああゝおれはなんて馬鹿なんだ。

どうして、優しい妻の気持ちをわかってやれないんだ。

どうやら目が見えなくなっただけじゃなく、心まで盲目になってしまってるじゃないかあ

そして、妻に言った。

「すまなかったな、俺が悪かった。許してくれ」

そうして、二人で抱き合って私は泣いた。

妻との三十年の日々で一番悲しい夜だった。

悲しい夜から、しばらくたったある日。

わたしが、リビングでうたた寝していると、

妻が興奮して、私を起こした。

「どうしたんだよ。そんなに慌てて」

「あなた、大変よ！さっきね。出版社から連絡あつてねあなたの作

品、新人賞に選ばれたのよ！」

「冗談だろう！」

「本当よ、新聞にも小さくでてるの。あなた見れないから、

証明できないけど、今度は嘘じゃない。あなた、おめでとう」

それから、三カ月後……

私と妻は新人賞の授賞式に来ていた。

式の司会者が私の名前を読み上げた。

私は妻に手をひかれて壇上に目録を取りにいった。

私の耳からは、場内の鳴り止まない拍手が聞こえている。

妻との三十年の日々で一番嬉しい夜だった。

そして、鳴り止まない拍手の中、壇上で妻と抱き合った。

了

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9257b/>

Love is blind

2008年11月7日09時22分発行